**因幡紀行**

神無月のなかば　三河の国を立ち

京、摂津、播磨を経て　因幡の国ヘ。

道中かごは　東海道新幹線・智頭急行。

鳥取へ三泊四日　駅前の鳥取大丸に隣接の

「旅籠新大谷　八階」連泊の　お気楽旅

「とっとりけん」

取鳥県？　鳥取県？　考えれば考えるほど

どちらも正しいように思え　混乱したことがある。

ご当地の説明では　県庁の所在地の名称で

水鳥を捕らえる職業の衆を

「鳥取部(ととりべ)」とつまらず
この鳥取部が住んでいたことに由来。

市内の名所を　文字通りバスで駈けずり回ると

市域の広いことが　印象的である。

六十年前の印象は　田舎の小都市であった。

神戸市と比較すると

人口は2019年　面積は2015年の比較で、

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| ( )は順位 | 神戸市 | 鳥取市 |
| 人口：万人 | １５４（６⇒７） | １９（１１８⇒１１９） |
| 面積：平方キロ | ５５７（１１６） | ７６５（５８） |

人口順位は　東京特別区を　国勢基準で順位０とするため、

実際の順位はそれぞれ　７位と１１９位となる。

**「砂の美術館」**

今回の主目的で　十三か国のプロ砂像彫刻家の作品競演。

第十二期の展示開催中　四月から来年一月五日まで。

テーマは「砂で世界旅行・南アジア編」

目の前の作品群に　圧倒され　来た甲斐があった。

「ガンジー像」「バーミヤンの大仏」

「インダス文明・モヘンジョダロ」などなど。

砂の世界であり　ライトの当て方により

印象に　かなりの差があると思う。

撤収で　すべて破壊されるのかと思うと

「うーん」と　発せざるを得ない。

入魂の「創造」と　時間限定の「破壊」が

出番を窺う　厳しくも激しい世界である。

**サブタイトルは**

**～信仰が息づく多様な文化と平和への道を訪ねて～**

とある　が

「平和への道」など　微塵も訴えてこない。

展示物には圧倒され　全館の雰囲気に打たれるが

砂像作家の創作への熱情を　台無しにするのが

ここでも　安っぽい　枕詞「平和」　連呼主義。

主義も主張も　体系化と理論化を試みると

行き着くところは　独断と排除が進行して

体系武装と理論武装となり　戦闘集団に様変わりし

異なる対象を　異物か異形と見做し

勝つか負けるかが　評価基準となり

善悪を問う必要は　全くない。

これにて　理性派は行き場を失い消失する。

歴史も我々も　これらを目にして来たが

気付くか気付かないかは　横に生き

これで　戦闘集団側の目的達成となる。

**「砂丘会館」**

美術館から徒歩五分　広告に釣られ海鮮丼

高く　不味く　盛り付け食材は薄ペラの

観光地で体験豊富な　三悪トリオ。

「丼」とあるが　土器状のプレート。

この地の期待と好感度も　急降下する。

**「鳥取砂丘」**

会館の向かいの展望台からの眺めで

砂丘への踏み込みを諦め　方向転換を試みると

それを見透した奥さんが　「さあー　登るでぇー！」

婦唱夫随で　一大決心の登坂開始。

観光客少なく　最初は下り　さらに

海を見渡せる高所の　「馬の背」へと挑まされる。

砂を踏みしめながら　黙々と

急坂登校で鍛えた足腰　なんてことない。

奥さんは　だんだん遅れの遥か後方だったが

最高地へ　やっとたどり着く。

目を転ずれば　登り着いた太っちょの青年が

相棒と駆け合いで登り　着いた途端に

笑いながら　苦しそうに　何度も咳こんでいる。

往路もきついが　復路もそれなりの覚悟が。

ついて来ない奥さんは　遥か後方で数人と会話中。

後で聞くと　らっきょう農家の女性連中。

健康のために　馬の背登坂が日課。

観光客相手の　ラクダが三頭　膝折りで待機中。

近づくと　手綱持つ　そばの馭者？連中にはない

はるかに哲学的容貌と　品格を具えており

長いまつげ　その上　泰然自若として

まさに「砂丘上の三賢駱駝」で　まぶしく

動物と人間世界の接点とは　案外「こんなもの」と

「砂丘上のわが悟り」に至る。

**「浦富海岸島めぐり」**

山陰海岸国立公園で　列島誕生の地質遺産とある。

六十名ほど乗船の遊覧船　救命衣の着用はない。

晴天下　奇岩・奇層の連続で　波もほどほど。

ふと気づくと　船長の説明が

明瞭で声量よく　気取りがなく

内容に魅力があり　その努力が感じられ

下船時に目にしたのは　五十台で風采よく

海の男で　適材適所の逸材と感じた。

観光地で　このような経験は珍しい。

**「国際好流」**

下船後　バスの待合所で

六名の二十歳台の中国人らしき女性

スマホで自撮りや周囲を撮り　会話も賑やかで明るい。

分け入り「話してよきや？」

反応はYes!らしく　しかも　皆が笑顔。

「いずこから来られしや？」「香港なり」

「今、大変ですな」と　その他　諸々。

声も高らか　共に明るく　笑顔で

思いのほかの盛り上がり。

バスの中では　我々の前後に座る。

鳥取駅前で共に下車。

面白いことに　小生が降車の際に

運転手に見せた　フリー乗車の手形を

目ざとく気付いた一人が

自分のを見せながら　小生のを見せろと言う。

彼女のは　ガイドブックから切り取った

ちゃちな手形の絵。

小生のは　手のひらサイズであるが

厚さもあり　頑丈な木製の将棋の駒の王将デザイン。

当方曰く　「そなたのは　安物で一枚紙なり」

中指で弾き飛ばすしぐさで　「見よ！弾けば飛ぶなり」

「わが持ち物は　硬くして優れものなり」

原文：Mine is so hard and super.

女性達は　オー！とかイヤー！とかで賑やかに

「ならば　触ってよきや？」

「われに断る理はなし　いつでもためされよ」

原文：Yes. You may. Why not. Any time you want.

彼女たちは　さらに盛り上がる。

触らせる。

「鳥取藩乗放題手形」とあり　三日間有効で千八百円。

隣接する町村のバスも無料で　おおらかである。

何処で入手できるか聞かれ　丁寧に応える。

通り過ぎる若いカップルが　何事や？の目線。

「これから　いずくへ？」「大山　そこにて泊まる」

「日本を心行くまで楽しまれよ！　再見！」

彼女たちも　にこやかに手を振り

思いがけない　国際交流（好流）であった。

このような場合　一人ぐらいは

群れから距離を置き　全員での盛り上がりはないが

この日の出合いは　全員の盛り上がり。

貴重な経験の　和やかな雰囲気でもあった。

まるで　映画のラスト・シーン。

異邦人のおかげで　この地の期待と好感度も

一挙に上昇する。

しかし　他人が降車するしぐさを感知して

その他人に確認する所作は　日本にはない。

訓練の結果とは　思いたくないが。

**先ずは　彼女たちの幸運を　心より願った。**

しかし　日本の若き女性となら

「変なジジイ！」「やべぇー！」「最低！」の可能性も。

老人よ　狭い日本に　閉じこもるな！

Boys, old, be ambitious! Be young!

**「白兎神社」**

大国主命と因幡の白兎の神社　海辺にある。

休日でもないのに　若い連中で賑わう。

蒲と蒲の穂綿を　じっくり観察。

いにしえの頃は　兎を包んだのは

蒲も穂綿も　もっと大きかったのでは？

**「賀露市場」（漁港市場）**

「賀露」　興味を持たせる漢字の組み合わせ。

遣唐使　吉備真備が復路　たどり着いた地で、

賀露神社に　真備を祀る。

当時は　瀬戸内海が航路であり　遠回りであり

難破・漂流である。

松葉ガニの解禁が二日前で　店は大賑わい。

はりこみ食すが　タラバガニと違い　こぶりで

今まで生きていたのを　網焼きしながら

なんだか可哀そうになる。

調べると、英語では　snow crabとかqueen crab。

タラバは　道理でki ng crabとある。

バス停で　台湾からの夫婦と会話。

重そうに　最高級の梨のケースを六個。

毎年　訪日し　ここ鳥取へも梨を求めて。

食に対する逞しさを感じる。

**「鳥取城跡」**

久松山に拠り　廃城であり

天守閣も天主台もなく　石垣がここかしこ。

２４時間開放　年中無休の　無料の城跡。

城跡の山頂まで　道狭く急坂で　城攻めを断念。

鳥取市の主要部を　眼下に遠望できる。

**「仁風閣」**

城跡入口の広場にある　洋風建築の国の重要文化財。

ド素人の小生でも　白亜木造瓦葺二階建ての

洋風建築と　その庭園の見事さに感動し、

文字通り　隅々まで見て回る。

明治三十九年に着工し　八か月で完成し

建築費は四万四千円　当時の市の年間予算五万円。

命名は　東郷平八郎海軍大将

直筆の命名額を掲げる。

**「異国人との出会い」**

宿への帰途　バスの停留所で

スマホに夢中の　中近東人らしき男性に話しかける。

米国人でニューヨーク市出身とのこと。

中学校で　英語の教師だそうで。

小生　駐在経験もあり　ホット・スポットや名所を

話題にするが　反応が今一で

市のどの部分に住んでいたかにも　明確さがない。

「日本人に話しかけられたのは　初めて」とか。

英語も　native Englishではない。

外国人と言うだけで　英語教師として採用？

異国と異国人との出会いには　「信」と「疑」が原則。

外交では　孫子によれば　さらに　信・疑・詭の

三刀流の使い分けが　必須である。

多くの異国側が　奉ずる鉄則である。

狭くて島国の日本では　相手を信じることで

生存を保証される　が　物理的領域が拡大する大陸で

大陸の種族が彷徨できる範囲は　広大で常に危険を伴い

信じられるのは　太陽と月と星と自己のみ。

日韓関係も　相手が大陸性種族であることの

認識が必要であると　こんな旅先で　思いが発展する。

**「鳥取東照宮」**

わが豊田市には　徳川家発祥の地　松平町に「東照宮」

御朱印記帳の女性に招じられ　社務所で話す機会あり。

東照宮は　七百社建立され　現存は百三十社。

江戸時代　諸侯は徳川家と幕府を信じ

ここでも　生存権を確保するため

競争して建立したようだ。

自民党の石破さんの邸宅は　すぐそことか。

盤石の地盤のようである。

それらしき邸宅が多々あり　確認は無理。

**「渡辺美術館」**

鳥取市の医師　渡辺元氏（1911～2017！）収集の

三万点の古美術と武具　まさに圧巻　圧館？

余りにも多い甲冑類　展示ケースからはみ出し

手で触れることも可能で　値打ちが下がる？

ドン・キホーテとサンチョ・パンサの

等身大の木彫りの像もある。

機会があれば　再度　じっくりと見学したい。

**「町中の様子」**

中心部のある商店街　閉め切った店が多い。

飲食処が少なく　漁港も近くなのに

海鮮の店も　飲み屋での営業。

食べる楽しみを期待し　ガイドブックも「食」満載たが

現実とは異なり　地方も変わりつつある。

日中と夜の街中を散策したが　静かである。

救われたのは　子供レストランというのがあり

その賑わいが　通りからもうかがえた。

よき風景　よき人々　よき作品　よき歴史遺産に接し

異国人との歓談もあり

日頃の様々な思いも　あらためて再考でき

その上　日々　晴天に恵まれ

楽しい　因州路への旅であった。